

生存科学研究 ニュース

VOL. 7, NO. 3, 1992. 5. 10. 発行

発行：財団法人 生存科学研究所

〒104 東京都中央区銀座4-5-1

聖書館ビル 303

電話 03-3563-3518

第5回環境・保健・産業問題研究会

3月7日(土)午後、研究所会議室において第5回「環境・保健・産業問題研究会」が開催された。今回はこれまでの研究を総括し、以下のように今後の研究の進め方について討議した。

地球環境に関しては、CO₂の増加による地球温暖化、フロンガスによるオゾン層の破壊、森林破壊や砂漠化など、産業活動に伴う環境破壊が指摘されている。これ等に対する対策は重要な課題であり、世界的規模で対処する必要があるが、困難な未解決問題を抱えており、まだ有効な方策は確立してはいない。

一方、環境変化による健康への影響についても、種々研究されているが、必ずしも確実な結論は得られていない。今後益々微量長期の生体への暴露が問題になるであろうし、その面での研究の推進が必要である。そのため、地域全体にわたる、緻密な健康情報の収集、分析が必要となる。現在の日本の保健・医療体制の下でも、十分なデータは得られないが、産業保健の下では相当緻密なデータが蓄積されており、それらを生かしながら、さらに、産業保健と地域医療のデータの整合性を図ることにより地域全体への正確な健康影響を研究することが可能であろう。

第3回東西の健康観・医・薬勉強会 「生体内の微量元素の意義— 特にゲルマニウムについて—」

3月12日(木)午後1時30分より、第3回「東西の健康観・医・薬勉強会」が開催され、前国立環境研究所所長不破敬一郎氏から上記のテーマで発表があった。

不破氏は、まず、武見太郎先生が人体と、微量元素、特に無機物との関係に関心を持っておられたこと、それも、宇宙、生命、人間の起源との流れのなかでこれを把握されていたことを、要点を掴んで説明された。

ついで、不破氏の教え子である早稲田大学理工学部教授松本和子氏が、天然物中のゲルマニウムの分析と動物実験の現状と、他の微量元素の、クロム、セレン、水銀などの生物学的研究の状況について話された。

討論は、天然物からなり配合物である伝統薬と金属との生物学から臨床薬理学までの研究方法の異同について、臨床栄養学との関係、金属の安全性、金属由来の薬物の開発可能性等について、活発にされた。

4月以後本勉強会は一部組織変更される。

第1回生存と経済勉強会 「日本の豊かさを検証する」

3月19日(木)午後1時30分より、第1回「生存と経済勉強会」が開催され、座長の帝京大学江見康一教授が「日本の豊かさを検証する」と題して発表した。

江見教授は提出資料を引用しながら、急速な経済成長で、日本人は総中流意識を持ったが、出る杭は打たれるの類で、厳しい環境に置かれており、公害や環境問題を含めて豊かさを考えなければならない時代になった。実像を見据えないと本当の日本の豊かさを体得できない、と前置きしながら、「国民生活白書」の問題提起、「豊かさ」を示す客観的指標、「豊かさ」の実感が感じられないのはなぜか、「豊かさ」とは何か、「豊かさ」を経済指標でどうはかるか、「豊かさ」をなんで感じるか、国際的にみて日本は豊かか、等について話され、精神的豊かさ、人間としての喜びは何か、と問い、豊富のなかの貧困になっているのではないか、「足るを知る」ことの大切さ、「良環境、中福祉、適正負担、高自由」という目標を示した。

この勉強会は、4月以降さらに拡充される。次回は5月21日(木)、発表者は再度江見教授、テーマは「これからの医療と診療報酬」。

第6回家庭問題研究会 「人間関係と社会文化」に関して

3月27日(金)午後6時より、第6回家庭問題研究会が開催され、今後の研究課題として「人間関係と社会文化」を取り上げ、それを巡って討議が行われた。

討議では、生存研の実践的研究の現地にも、本研究会が関与することの必要性、現地研究での調査の方法論検討の必要性、既存の生活調査やアメニティー調査の研究の必要性、家庭機能の要件やリスクファクターの研究の必要等が論じられた。

なお研究会の名称については、「人間関係と社会文化」の他、「家庭と生活文化」など今後メンバーの意見を入れて考える予定。

東北プロジェクト現地研究会 第2回 安家訪問

3月14日(土)～15日(日)、岩手県下閉伊郡岩泉町安家に生存研のメンバーが第2回目の訪問を行い、研究会を開催した。

研究会には、メンバーとして、仙台市健康福祉事業団加藤理事長(沢内村病院初代院長)、農林水産省農業研究センター小泉総合研究官、農林水産省農林水産技術会議草野課長補佐、神戸芸術工科大学斉木助教、東邦大学医学部豊川教授、千葉県安房医師会梅園副会長、小平専務理事、中山常務理事が、岩手県在住のメンバーとして、岩手県予防医学協会桜井理事、同栗原常務理事、田野畑村保健センター将基面所長、岩泉済生会病院柴野院長、現地からは、岩泉保健センター木村保健婦、森と水を守る会工藤氏、安家小学校田崎教諭、玉沢(文)氏、玉沢(安)氏、嘉村女史はじめ地域住民多数が参加。

14日は午後2時から8時迄、安家住民手作りの丸木小屋でいろいろを囲んで討議が行われ、15日午前中はそれを総括する形で各自の意見が発表された。

討議では、生存研の目的の説明と「今何かをしなければ人類の生存があやくなる。皆で出来ることを何か一緒にやろう」という共同研究の呼びかけに応じて、安家の山林や溪流が荒れてきている状況、農林業、教育、保健、家庭等の実情、経済基盤の弱い生活、現場と行政の食い違い、自治組織機能を失ったかつての町村合併への反省等に関して種々の問題提起と討議が行われた。会議の進行につれて「安家の自然と生活を守るために、一人では出来ないが、皆で裸になって話しあい、力を出しあえば何か出来る、しなければならない」との意識が醸成され、自分達で安家の実態を調査し安家白書を作ろう、安家議会を作って皆で何が出来るか考えよう、との提言がなされ、今後生存研の協力のもとにその方向で検討し準備を進めることになった。

九州プロジェクト現地研究会
肝属・大分・別府訪問

3月21日(土)～23日(月)、生存研小平専務理事、鈴木常務理事(多摩大学教授)、中山常務理事が、鹿児島県肝属医師会、大分市・大分市医師会、別府市医師会を訪問。それぞれ、肝属医師会黒木会長、津崎医師会病院院長、今隈副院長と、大分市長、助役と、吉川大分市医師会長(現在大分県医師会長)等と、伊藤別府市医師会長等と、生存研との共同研究に関して会談した。

肝属では、肝属医師会病院の医療・保健活動と地域の実情の説明を受けた後、医療・保健統計からの実態把握と地域住民との対話から生まれる住民参加の科学的地域医療・保健計画の作成とその推進が必要で、それにより地域医療の客観的評価や医師会病院の基盤確立も可能になるであろうとの合意の下に、今後の研究を進める話し合いがなされた。

大分では、大分市当局からも必要なデータ提供の協力を受けながら、医師会立アルメイダ病院、健康増進センター、大分市医師会はじめ県医師会レベルの拡がりでの協力のもとに、地域医療の投入産出分析や地域医療と産業保健の機能融合・データ統合、それに基づく客観的評価可能な医療システム構想作りというような共同研究について討議された。

別府では、別府市と生存研との共同研究の一環として、例えば疾病・死因統計などから見られる別府市の保健・医療の問題点を明確にし、それへの対策を起動力とすることによって、医師会が住民・医師会・行政の三者一体となった地域医療・健康作り計画の研究に取り組むということについて会談した。

日本海沿岸プロジェクト現地研究会
新潟県新発田市訪問

4月9日(木)～10日(金)、新潟県新

発田市を生存研執行部が訪問。二市・北蒲原郡健康開発センター、新発田社会福祉センター(通称ボランティア・センター)を視察。新潟県医師会馬場会長、新発田・豊栄・北蒲原郡医師会富樫会長、川井副会長はじめとする役員、新発田市今市長等と会談。

当地域は、医師会と行政との協力により永年極めて綿密な計画的包括的地域医療を実践してきている。しかし、今後の社会、産業、人口の変化を見通した将来対策を今から検討することは必要であり、そのための生存研との共同研究の必要性とそのあり方等について準備的な検討がなされた。

第1回総合解析委員会

4月3日午後5時30分より、第1回総合解析委員会が開催された。これは、3月13日に開催された第3回理事会で承認された平成4年度事業計画に基づき、地域実践的研究に関するデータを総合的に解析することを目的に作られた新しい委員会で、今回は、地域の実践的研究プロジェクトの進捗にともない、そのデータ解析の本格的始動のための準備的性格をもっている。

会議には、筑井亜細亜大学教授、鈴木多摩大学教授、師岡東海大学教授、財団の向山顧問、財団執行部が参加。当面既存のデータを分析しながら、逐次足りないデータの補足を行う、始めから完全なものを求めるというより、研究を進めながら補強して完全に近付ける、現状の分析を目的とするというよりは、あるべき姿を求めて、その実現の方策を探る、等が討議された。

このほか今回理事会で承認された平成4年度事業計画で、既存の学問的枠組の中でそれらを総合しながら深化させる研究会、既存の学問の枠を外して統合的に検討する委員会、地域の現場で実践的に研究するプロジェクト、会員の自由参加による会員研究会(旧勉強会)という研究枠組が出来上がった。

研究所日報

3月6日 (金)	常務理事会
3月13日 (金)	第2回評議員会
同	第3回理事会
3月16日 (月)	『生存科学』編集委員会
4月3日 (金)	川崎病研究会(準備会)
3月26日 (木)	(生存基金運営委員会)

第5回 武見国際シンポジウム 案内

ハーバード大学公衆衛生大学院武見記念国際保健講座が2年毎に開催している武見国際シンポジウム(第5回)が生存科学研究所の主催により7月15日(水)16日(木)17日(金)の3日間にわたって日本で開催される。これまでニュースでも予報し、また会員には各個に案内とプログラムが送られており、詳細はそれによって確認していただきたいが、補足的な情報をお伝えする。

シンポジウムのメインテーマは「健康開発にかかわる倫理的諸問題」であるが、これは青木清常務理事(上智大学生命科学研究所所長)を中心に、日本の歴代の武見フェローが協力してプログラムを準備したもので、武見思想の展開上欠かすことのできない重要課題の一つである。発表者を世界各国の歴代武見フェローから公募し、論文を厳選している。この結果、シンポジウムは、武見フェローに対する評価となると同時に、武見プログラムそれ自身に対する評価ともなる。

第2日目の午前中は会員への公開講座となるが、(それ以外の部分へも事前の申込みがあれば参加可能)ここでは武見思想に関する生存研側とハーバード大学側両者の見解が発表される。

武見思想を、言葉の壁のある諸外国の武見フェローに少しでも理解してもらい易いように、研究所では小平専務理事による生存研の見解の発表と一緒に、武見思想と、それを展開している生存研の研究姿勢や業績を映像化してプレゼンテーションする。

いま一人の日本側の発表者、生存研の西岡理事は日赤血液センター顧問で、武見先生の肝炎対策を日本中に展開した中心人物の一人であり、現在エイズも含め肝炎対策の国際的実践に活躍している。

ハーバード側の発表者、L.C.Chenは、ハーバードの武見プロフェッサーで、国際保健の実践者として永年活躍していた研究者である。

第3日目の午前中は、第1日目第2日目の発表をふまえての総合討論であるが、それに先立ちバイオエシックスの権威 H.Tristram Engelhardt氏の講演がある。

会員諸兄の御参加をお待ちします。

ハーバード大学武見講座活動報告

報告者 門司フェロー

Takemi Seminar

- 3/16 Current Trends in the NHS/D.Evered
 - 3/23 National Council of International Health /E.Putnum
 - 3/23 Environmental Policy in India /M.Reich
 - 3/30 Building Applied Health Research Capacity in Less-Developed Countries: Problems Encountered by the ADDR Project/ J.Simon
 - 4/13 Research Communication/G.Gleason
 - 4/27 A New Public Health/P.Rosenfield
- Takemi Forum
- 3/12 Study Designs for Infectious Disease Epidemiology: Assessing Vaccine Efficacy/C.Struchiner
- Takemi Luncheon
- 3/12 Research Presentation /C.Possas
 - 3/17 Research Presentation /J.Nguma
 - 3/19 Research Presentation /B.Mendis
 - 3/26 Research Presentation /U.Amazigo
 - 4/9 Current Activities in the Socio-Economic Research Group in TDR /B.Singer
 - 4/23 Health Problems and Health Policies in the City of Boston/A.Plough